

同窓会会報

第31号

昭和56年9月8日
発行所 茨城県東茨城郡
内原町鯉淵5965
鯉淵学園同窓会
印刷所 佐藤印刷株式会社

《有為の人材の教育》 学生募集に同窓生の力を

和田 文 雄

五十六年度入学式を終ったあと学園関係者の間から応募者の減少について異口なげきの声がかかれた。

農学科系への志望者が減少したのは何も学園にかぎったことではなく、国立、私立とを問わず一律に倍率を低下させていた。こうした現象は冷害による農家の不安定、米の過剰などからの農業問題の混乱などが世情にのぼると農業科系志望が減少するという。

これは、農業を職業としようとする者の減少というより農業に関連する職業に従事するため、即ち農業や農村を市場としたり、あるいは公共機関の農業分野での新規職員の採用状況によって影響を受け左右されていることからである。最近の雑誌に「農業者の方に

顔を向けなくて専らペーパーの方にだけ顔を向けている研究者、おおよそ農業者の教育とは縁のないような大学農学部、教育機関の少くないことも否定しがたい現実である……農業者は、やがて、自分たちの要求を満たさない、これらの機関を相手にしなくなる」という一文があった。

さて、応募者の減少をなげくうえで農業者から相手にされる学園について考える必要があると思う。

◎全寮制の意義◎

全寮制という制度は古風なわが国の学園の一端である。その古風な学園を継続してゆくからにはその制度の意義を徹底しなくてはなるまい。

全寮制の意義を学園や経営者がいか

に説明するか。同窓生が体験した寮生活の中から次第に引継いできた全寮制の意義が、現在の全寮生の中に充溢しているものと確信し、今後この制度が学園教育の中心となり教育の効果を高めるものとならなくてはと考える。

しかし、最近学生の父兄から寮生活の実態をきき愕然とさせられた。また父兄のみか学生の出身校へも寮生活の無意味を訴えているという。

「大学の自治」が果たして特権として認められることが、国民的合意であるかという疑問は大学紛争の折、全国民は反吐が出るほど馬鹿げた問題として知らされている。

その行為は自治ではなく「自治の破壊」であったからである。真の自治を築く努力が学生の中から失われ、教育者が教育指導の理念と実践に欠けるときもはやそこには全寮制の意義は存在しなくなってしまうことになる。

学園制が寮生活に起っている問題点に對して、全寮制に対する正しく強固な理念と指導を行うことによつて全寮制の意義が鼓舞され、教育の理念の実現と社会活動への効果が期待できるものとなるのではなからうか。

特に三年夕ヶ部屋組みの効果に疑問をもつ意見をきいたが、全寮制による強固な教育方針とは「塾」教育の現代的顯現でもあることから、一、二、三年生が同室し、自治社会と学園教育が一体化するものとして、むしろ強めな

ければならないものであるともいえる「塾」における兄弟弟子の切磋琢磨は師弟間の教育効果を相乗的に高めるものとなるからである。

●節によって学校を選ぶ●

かつて志望校をきめるときは「あの学校には、あの先生がおられるから、あの学校にゆく」というのが学生気質であった。こうした学校のきめ方が絶えて久しいといえよう。もっとも、いかに希望しても入学はおろか出頭すらできない現実に押し流されているといえる。

いづれの教育機関においても教育担当者や研究や社会での活動の評価を高めるよう努めてきたであろうし卒業生の実力や活動を通じて名声を高めたであろう。

このような中で、「節」によって学校を選ぶ」という理想を実現するには、法律や経営費や特定な思想などにはばられない学校経営が必要である。「節」によって選ばれる学校として、学歴主義や資格主義に毒されない理想の教育機関としての学園の体制があるであろうかと三十年余を経た学園教育について静かにふりかえってみようではないか。

「節」によって選らばれた「栄光」は遠き昔におきざりにしたままではなるまい。

その栄光の輝きをあてるに、また真に志望者に「節」をもって選らばれる学校たりうるか惶然たるものなしとは

しないのである。

◎学園教育の伝播を◎

去る六月二十七日同窓会館に学園側は学園長はじめ総務、教務、学生、園芸、畜産農場の全課長と担任教授、そして学園に残った同窓生、さらに、茨城県ほか近県から十名余りの同窓生が出席して、学園から申し入れのあった学生募集の対策について協議した。また同時に最近の学園の教育及び学生生活について問題点の検討を行った。

学生募集の協力依頼について

残暑の候ではございますが、同窓会のみなさまには相変らず御清祥のこと拝察申しあげます。

扱、学生募集の件につきましては、かねがね一方ならぬ御協力をいたしたきながら、われわれ学園サイドの非力からか、ここ二年ばかり応募者の減少が目立ちはじめ、とくに生活栄養科は定員の三割前後におちこみ、われわれ一同憂慮している所でございます。これには農業をめぐる諸情勢のむづかしさ、とくに改良普及員の資格試験制度の改正問題、ひいては三年制の意義にまで及ぶ広範な要因が考えられないわけではございません。従って、府県の農業大学校の性格変更までを視野に入れての学園教育体制の再編を鋭意検討中でご

学生募集の現実的問題をかかえたい学園はいかにあるべきかの小田原評定でもあるまいからこの際、同窓生の日常の活動による学園教育の伝播をはかり多くの学生を迎え入れ、また学園の教職員が奮起した「業学一致」の履行によって、有為の人材をこの時期にこそ輩出させるために同窓生各位が日本のどの農村からも、もれなく秀れた後輩が集るよう努力することとしようではないか。

鯉淵学園長 吉川 直行

さいますが、資格試験については目下の所、五七年度入学生までは従前通りの取扱いということになっております。何れにせよ学生あつての学園であることに変わりはありません。そこで協会はもとより学園の総力をあげて学生募集に取組むべく、別紙対策の一環として同窓会の役員会におはかりし、幸い御理解を得て今回の支部長各位へお願いということになった次第です。役員会の席上学園の近況について数々の苦言もいただいております。職員一同心を新たにして事にあたる所存でございますので、農家の子弟はもとより農業に志向をもつ非農家の若者（最近ふえております）を、一人でも多く御推せん下さるようお願い申し上げます。

昭和五十七年度 学生募集対策

一、三カ年制移行後の 応募者数の動向

昭和五十四年、学園が三カ年制に移行後の応募者数の動向は、表の通りである。すなわち、昭和四十年代後半に減少、五十年代に入つて増加に転じ、五十年代後半に入つて、再び減少の傾向がみられる。またコース毎の傾向としては、園芸コースが圧倒的に多いが長期的には、畜産コースは上向き、生活栄養科は低落傾向がみられる。

二、学生募集の基本的態度

学園の応募者数は、一でみたように理由は判然としないが、四五年の周期で増減しており、しかも昭和五十六年度は、過去十一年間で最低である。学生数の減少は、学園の社会的使命を考えると、重大問題であることは云うまでもないが、更に、学生の負担金が相対的に増大している現状では、財政的危機にもつながる。われわれは、以上のような認識に立ち、全職員一丸となり、総意を結集して、低減傾向に歯止めをかけることを決意し、以下の方針で、入学者獲得対策を講じる。

三、入学者獲得対策

一、一般的な対策

- ① 日本農業新聞に三回掲載
- ② 農村部を中心に、農協に学園要覧を直送する。
- ③ 高校二千三百校に学園要覧を直送する。(イ、ウは七月上旬迄に終了)
- ④ 畜産向けの雑誌への広告
- ⑤ 従来依頼してきた無料宣伝方法は引続きの利用
- ⑥ 中央諸団体機関紙への広告依頼

二、応募者不振都道府県対策

従来入学者が相当数あつて、現在不振な都道府県は、北から北海道、富山、鳥取、広島、徳島、香川、愛媛、佐賀、熊本、鹿児島、十道県である。これらの道、県については総合的な分析が必要であるが、とりあえず、本年度は以下の対策を講じる。

- ① 当該道県の同窓会支部に実情を理解していただき、積極的な協力を依頼する。
- ② 学園職員で当該道県に知人のある場合、本人の依頼状を添えて協力を依頼する。

三、応募者多数高校対策

引続き学園教育の理解をいただくため細かい対策を講ずる。該当高校は全国に七十二校ある。

- ① 鯉淵学園通信(近く復刊)、鯉淵

鯉淵学園における応募者の推移

年度	応募者				合格者				入学者			
	園	畜	生	計	園	畜	生	計	園	畜	生	計
45	99	51	52	202	82	45	48	175	57	38	38	133
46	74	36	35	145	71	34	35	140	50	24	31	105
47	67	27	33	127	66	27	32	125	49	18	27	94
48	77	26	35	138	74	24	35	133	56	18	27	101
49	70	22	34	126	65	22	33	120	52	18	27	97
50	(86) 96	(36) 26	42	164	83	35	41	159	64	31	35	130
51	(101) 120	(54) 37	(46) 44	201	70	51	46	167	55	44	36	135
52	(110) 130	(59) 45	(45) 39	214	69	50	41	160	53	44	37	134
53	(124) 139	(57) 46	(36) 32	217	72	56	35	163	57	40	30	127
54	(103) 127	(58) 39	(46) 41	207	74	52	45	171	56	42	35	133
55	(85) 94	(58) 50	(30) 29	173	77	53	27	157	58	39	20	117
56	75	36	14	125	70	33	14	117	47	24	12	83

(注) () は志望修正後の数

② 努めて機会をとらえて、学校訪問を実施し、相互の絆を強化する。

四、卒業生対策
学園への入学の動機について、在学生を対象として、調査したところによると第一が出身校、次いで卒業生となっている。また、学園設立後三十五年を経過し二世入学も増加する傾向にある。

① 同窓会報を通じて同窓生に協力方を依頼する。
③ 支部長各位に協力方を依頼する。
五、在校生対策
学園が、日本農業の発展、農村生活の改善という社会的使命を果たすためには、一人でも多く、優秀な後輩を確保することが先決であることを訴え、協力方を依頼する。

体育館兼講堂の竣工成る

昭和56年度の国庫補助により、5月に着工した体育館兼講堂は、工事が着々とすすみ、8月末に落成、9月1日に引渡し検査がおこなわれた。

建物の規模は、床面積814.2㎡(間口23m、奥行35.4m)で総工費は8,860万円である。



19期・20期・21期生の皆さん方に

近 秀 次

皆さん方、しばらくでした。皆さん方が卒業されてから、はや五年の年月がたちました。卒業後、農業自営、普及員、農協職員等への途を進まれた皆さん方は、現在、それぞれの分野でご活躍のことと推察、お慶び申し上げます。

学園も、皆さん方を社会に送り出してから今日までの間に、随分変化いたしました。

学年制(二か年制から三か年制に)

を始め職員、施設等々において……、これらのことは、すでに同窓会報等を通じてご承知のことと思っております。述べることは省略させていただきます。

さて、お便りいたしますのは、実は皆さん方にぜひご了解を得たいことが生じた為です。それは、皆さん方が卒業の際、学園に寄贈して下さった順募(一九、二〇期生)と補募(二一期生)を、まだ寿命があつて使える部分について、別に述べている新築中の体育館

兼講堂の備品として、それぞれ使用させていたこととあります。

皆さん方から寄贈をうけたこれらの品には講堂の備品として、入学式・卒業式・自治会主催の文化祭の進行事・演劇・弁論・音楽等の際、有効に活用させていただきます。

それで、今回、新しい体育館兼講堂でも前回と同様に使用させていただきますかと思っております。このことについて、この紙上をお借りして皆さん方のご諒解をぜひ得たいと思っております。それで、皆さん方が来園の際、体育館兼講堂にもぜひ立ちよっていただき、暗幕、抽幕がいかに活用されているかを見届けていただきたいと思っております。それでは、皆さん方の今後のご健勝とご活躍を祈ってペンをおきます。

会員名簿の発行

来る十月

前号をもってお知らせしました会員名簿の発行は、各支部等の御協力を得て、このほど原稿の整理がほぼ完了し印刷に回す運びとなりました。御協力をいただきました関係各位に、御礼を申し上げます。

印刷に付してから製本までに約一ヶ月を要しますので、発行の時期は十月上旬を予定しております。

発行部数 一〇〇〇部
頒価（送料共） 二〇〇〇円
会員名簿の発行経費につきましては、頒価をもってあてることになっておりますので、印刷製本代、原稿作成代等

同窓会大会開催について

定例の第十五回同窓会大会を左記により開催いたします。

前回の第十四回大会は、過去の大会中最も出席者が少なく、盛りあがりには欠ける大会でした。今大会は、同窓会組織が成ってから三十年の記念すべき大会であります。また、学園では、改良普及員資格試験制度改正とも絡んで、懸案が山積しております。是非多

くの会員の皆様に御出席いただき、大会を盛りあげ、学園の発展のため、大会の力を結集しようではありませんか。

大会日程
十一月七日（土）
受付 一時より 同窓会館
大会 三時より六時まで
三番教室

から頒価を決定しました。それにしても、本会にとっては、多額の経費を必要とし、同窓会館建設のために基本金を充当したこともあって資金に苦慮しております。

同窓会会費納入のお願い

同窓会会費納入のお願いについては前号でもお願い致しましたが、全く反響なしの状態です事務局としても苦慮しております。

同窓会館の建設を成し遂げた後の気のゆるみ、活動も停滞、こうしたことが反映しての結果とも思いますが、会

懇親会 六時半より 一番教室
宿泊 同窓会館米沢宿舎
十一月八日（日）
常任委員会 九時より 同窓会館
会費

大会参加費 一、〇〇〇円
懇親会費 三、〇〇〇円
宿泊費 一、〇〇〇円
昭和五十七、五十八年度同窓会費 二、〇〇〇円

合計 七、〇〇〇円
定例の同窓会大会は、十一月三日に開催することになっておりますが、各地とも、いろいろな業務の開催が予想

費は、同窓会活動の源泉です。

現在の本会の財産は、基本金、一般会計を含めて百万円を割り、近く発行する会員名簿の発行費をも賄い切れないう状態にあります。一般会計は赤字で、このままいくと、本会の業務も停止せざるえません。

こうした事態におい込まれることのないよう、会費の納入につき特段の御協力をお願いする次第です。

尚、振替用紙は、会費納入の済否とは関係なく、会報発送業務の都合上、全員に同封します。悪しからず御了承下さい。

され、大会出席が困難であること、本年は、三日の前後が休日でないことを考慮して七日に決定しました。尚、大会出席の連絡は十月末日までに必着するようお願いいたします。

編集後記

今回は、学生募集協力の特集号として、急いだ発行のため四頁となりました。次号は十二月で八頁を予定しております。支部の動き、同期会の様子等を投稿下さい。